

2016年10月18日 10月22日改訂 12月6日再訂 12月9日三訂

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺20

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

日本人の南シナ海への関与に関する検討の補足である。とくに海軍水路部（以下、水路部）の Spra トリー諸島周辺海域についての測量・海図作製について述べたい。海軍水路部に関しては、[小林 2015]参照。

水路部が Spra トリー諸島方面について作製した最初の海図は外邦図デジタルアーカイブズで見ることができる次のものでないかと思われる。

海図 529 号甲

支那海南部東区

1904年（明治37年）刊行（1905年再版）

「本図は一八八一年十一月出版一九〇三年十二月小改正ノ英海軍海図第二六六〇号Bニ因ル／原図ハ一八八一年マテノ最近諸測量ニヨリ編成ス」とあり、イギリス海軍による19世紀中葉以降の Spra トリー諸島海域諸測量事業の集大成（British Admiralty Chart No. 2660B.）を水路部がそのまま受け継いだことが知られる。地図の下部には、” under the Superintendence of Rear Admiral K, Kimotski (sic.), I. J. N. Hydrographer” とあり、当時の水路部長肝付兼行を責任者として発行されたことが知られる。

その後、20年代の半ばまでの Spra トリー諸島方面での水路部の活動は知られていない。しかし、『日本水路史』によれば、フランスが1933年に Spra トリー諸島の領有を宣言する以前から、水路部はこの海域で活動を開始しており、「昭和4年（1929）にこの地区の横断航路を略測して以来数回の測量を実施」（西暦嶋尾、以下同じ）した。1936年（昭和11年）と翌37年（昭和12年）の測量によって、海図刊行が可能となった[海上保安庁水路部 1971: 244]。

そのとき作製された海図は国会図書館地図室で見ることができる。

水路軍機第521号

北險礁

地図の下部には「昭和13年（1938）3月14日刊行 水路部長 小池四郎」「小改正（昭和14年[1939]）-111」とあり、注記に「昭和11年（1936）我ガ海軍ノ測量」とある。機密地図は「軍機」と朱書され、朱色の太線で外郭が囲まれている。

水路軍機第 522 号

長嶋附近

地図の下部には「昭和 13 年（1938）4 月 27 日刊行 水路部長 小池四郎」「小改正（昭和 13 年）-83-（15 年）-9-51」とあり、注記に「昭和 11 年（1936）及同 12 年（1937）我が海軍ノ測量」とある。

水路部軍機第 525 号

新南群島諸分図

地図の下部には「昭和 14 年（1939）6 月 22 日刊行 水路部長 小池四郎」とある。この地図には「注意 本図ハ略測ナルヲ以テ使用者ハ注意ヲ要ス」とあり、スプラトリー諸島南方海域のまだよく知られていない危険地帯 9 箇所について簡略の測量を行った結果によるものであることが知られる。9 箇所の図を一枚の海図に盛り込んでいる。調査の年次については、「昭和 12 年（1937）7 月及同 9 月」（三叉礁）、「昭和 12 年 6 月」（相生礁）、「昭和 12 年 6 月」（二見礁）、「昭和 12 年 9 月」（五ツ礁）、「昭和 12 年 5 月」（三門礁）、「昭和 12 年 9 月」（亀甲島及南洋島附近）、「昭和 12 年 7 月及同 8 月」（長瀬礁）、「昭和 12 年 6 月至同 8 月」（金輪堆）、「昭和 12 年 5 月」（蓬莱礁）とある。

海図番号 249

新南群島諸島嶼

地図の下部には、「昭和 14 年（1939）7 月 14 日刊行 水路部長 小池四郎」「昭和 14 年 7 月 21 日印刷発行 印刷者／発行者 水路部」「小改正（昭和 14 年）-807-（15 年）-213」とある。これは機密海図ではなく、「定価金 1 円 50 銭」と記されている。「昭和 13 年迄ノ諸資料ニ拠ル」との注記がある。北險礁、干津礁及須美礁、鳩礁、千里堆の簡略化された図を一枚の海図に収めたものである。

水路部軍機第 524 号

新南群島

地図の下部には「昭和 16 年（1941）11 月 19 日刊行 水路部長 小林仁」「小改正（昭和 18 年[1943]）-9」とあり、注記に「昭和 11 年（1936）至同 16 年（1941）我が海軍ノ測量／ボルネオ附近ハ 1939 年迄ノ英国及米国海図ヨリ採ル」とあり、1936 年・37 年以降にも水路部によりこの海域の調査が行われたことが窺われる。英米のスプラトリー諸島周辺海域調査については[Hancox & Prescott. 1995; Hancox & Prescott.1999]が検討

している。

海上保安庁海洋情報部海洋情報資料館が作製した海図所蔵目録（旧版海図＞軍機海図）により、海図番号 523 の「千里港及諸礁」という海図が存在していることが知られる（<http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KIKAKU/kokai/kaizuArchive/howto.html>）が、現物は未調査である

このほか、昭和 16 年 3 月には『台湾南西諸島水路誌』が刊行され、その中の第 8 編が新南群島について記述している〔（海軍）水路部 1941：243-253〕。当然のことながら、機密海図には言及がなく、市販された番号 249 の海図と一時代前の海図 529A（上述の 529 号甲のことであろう）に言及があるのみである。

Hancox と Prescott の研究は、1936 年と 37 年の水路部によるスプラトリー諸島海域の調査が、特務艦勝力によって行われたことを明らかにしている〔Hancox & Prescott.1999: 101-102, 106-120〕。1937 年には、イギリスの調査艦 HERALD が調査中の勝力に遭遇している。艦長 Hardy は Itu Aba Island に上陸し、日本の士官および「Mr. Sadae Chiya, resident manager of Kaiyo Kogyo K,K., Takao(Kaohsiung)」に会っている。昭和 6 年（1931）1 月 14 日發付の「叙位上奏案」（海軍省—公文備考—S6-15-4117〔所蔵館：防衛庁防衛研究所〕、アジア歴史資料センター）には、「叙正五位〔昭和五年十二月二十四日予備役〕〔明治四十年十二月二十日任海軍少尉以来在職十年以上〕海軍大佐従五位勲三等」「功五級」のなかに「千谷定衛」の名が見える。後藤乾一は、1938 年 8 月に新南群島に寄稿した勝力艦長から海軍軍務局宛の公信のなかに「千谷大佐」の名前が見えることから、開洋興業を海軍のダミー会社とみなしている〔後藤 1995：324〕。あるいは、開洋興業側が海軍とのパイプ役として予備役の千谷にお願いした可能性もなくはないように思われる。

なお、日本の調査が、スプラトリー諸島の北側を中心としていたのに対し、1920 年代後半から 30 年代にかけてのイギリスのスプラトリー諸島機密調査は海域全体を徹底的に精査するものであり、22 の疑存（存在が疑わしい）地点について島や礁が存在しないことを確認し、その機密海図（Z. 15, Z. 16）から削除している〔Hancox & Prescott.1999: 123-133〕。これらの機密情報は当然日本には伝わらず、日本の海図にはこれらの疑存島（礁）が残されたままであった。

特務艦勝力のスプラトリー諸島方面での測量活動については、防衛省防衛研究所所蔵の公文書によってもその記録の一部が確認できる。

水路部第二課長から勝力艦長に宛てた昭和 11 年（1936）4 月 1 日付の「測量実施ニ関スル細項依命通知」（海軍省—公文備考—S11-164-5164、アジア歴史資料センター）には、測量すべき地点・内容・方法について詳細な指示が出されている。調査項目と調査地点を下記に抜粋しておく。

一 海岸測量

イ 経緯度測量

(一) 測点

北東草沙堆（北險礁）、「イツアバ」島（チザート堆）

〔省略〕

ロ 磁気測量

(一) 測点

北東草沙堆（北險礁）、「イツアバ」島（チザート堆）

(二) 観測要素、回数及時間

〔省略〕

ハ 掃海測量

(一) 掃海区域

現地ノ状況ニ応ズル如ク適當ニ参酌ス

(二) 深度

〔省略〕

ニ 潮流測量

〔省略〕

二 海洋測量

イ 測深

〔省略〕

(一) 險悪海面ノ測深

〔省略〕

(二) 馬公至新南群島航路上ノ測深

〔省略〕

(三) 其ノ他ノ海面

〔省略〕

ロ 採水及測温

〔省略〕

ハ 測流

〔省略〕

ニ 水色及透明度ノ測定

〔省略〕

三 気象測量

イ 艦上観測

(一) 高層気流観測

〔省略〕

(二) 「スクール」ノ観測

〔省略〕

(三) 一般気象観測

〔省略〕

ロ 陸上観測

左記諸島（北検礁と「チザート」堆：嶋尾）ニ気象班（士官又ハ特務士官、
下士官兵ニヲ以テ編成ス）ヲ派遣シ気象観測を行フ

〔省略〕

四 雑件

〔省略〕

North Danger と Itu Aba Island を中心に詳細な調査が行われ、島への上陸も行われていることが知られる。

又、勝力艦長が馬公から海軍大臣に送った昭和 11 年 8 月 10 日付の極秘文書（勝力機密第二号ノ一〇）「行動予定変更ノ件報告」（海軍省一公文備考—S11-165-5147、アジア歴史資料センター）には、勝力の 8 月以降の行動予定が次のように記されている。

軍艦勝力八月以降行動予定表

| 月日 | 発着地名 | 記 |
|--------|-------|----------|
| 八 一 五 | 新南群島発 | 測量並ニ回航 |
| 一〇 | 馬公着 | 補給休養 |
| 一〇 | 馬公発 | 回航 |
| 一一 | 高雄着 | 補給機関手入休養 |
| 一七 | 高雄発 | 測量並ニ回航 |
| 二二 | 新南群島着 | 測量 |
| 九 一 四 | 新南群島発 | 測量並ニ回航 |
| 九 | 馬公着 | 補給休養 |
| 九 | 馬公発 | 回航 |
| 一〇 | 高雄着 | 補給機関手入休養 |
| 一六 | 高雄発 | 測量並ニ回航 |
| 二〇 | 新南群島着 | 測量 |
| 二八 | 新南群島発 | 測量並ニ回航 |
| 一〇 一 二 | 馬公着 | 補給休養 |
| 五 | 馬公発 | 回航 |
| 一〇 | 呉着 | |

台湾の高雄を拠点とし、馬公を経由地として、スプラトリー調査が行われたことが伺える。10 日前後の測量調査を行っては馬公・高雄に戻って補給・休養・整備を行うという方

式のものである。また、測量実施の指示にあるとおり、航路上でも海洋測量が行われている。少なくとも7月から8月にかけて3回の調査が行われたことは確認できる。

水路部長から海軍省軍務局長に宛てた昭和11年4月30日付「昭和十二年度予算事項ニ関スル件回答」（水機密第5002号）（海軍省—公文備考—S11-166-5148、アジア歴史資料センター）に記された昭和12年度測量計画によれば、勝力は4月から10月まで、本州南岸、新南群島、台湾西岸の調査を行うことになっている。昭和11年の日程も同様であったとすれば、6月以前から新南群島の調査が行われていた可能性はあろう。

Hancox と Prescott は、1936年と1937年の調査の結果、日本海軍水路部は以下の海図を1938年に刊行したと述べている[Hancox & Prescott. 1995: 37-38]。

IJN-HO 521-3 Hakuken Sho

IJN-HO 522 Nakashima Fukin

IJN-HO 523-2 Tizato Tai

IJN-HO 524 Shinnan Gunto

IJN-HO 525 various reefs in Shinnan Gunto

上述のとおり、IJN-HO 523-2 Tizato Tai に相当する海図は国会図書館の地図室には存在しなかった。

Hancox と Prescott によれば、第二次大戦後、これらの機密地図を入手したアメリカ海軍水路部はこれらの情報を自らの機密海図に盛り込んだ。1950年10月に出版された USHO5658 *Plans in the South China Sea* のなかの North Danger Plan は日本海軍水路部の521号の機密海図に基づくものであり、HO5659 *Tizard Bank* は523号の機密海図の複製である。1951年7月に刊行された HO5657 *Plans in the Dangerous Ground* のなかの7図が水路部の525号機密海図に基づいている。台湾海軍水路部も日本海軍水路部の機密海図に基づいて海図を作製した。1953年に出版された ROC476 海図と ROC478 海図は、それぞれは水路部の524号と523号の機密海図に基づいている。また、1956年に出された ROC477A 海図は日本海軍水路部の525号海図の複製である[Hancox & Prescott. 1999: 143-156]。

以上のとおり、1930年代後半に中国がちゃんと調査もせずにスプラトリー諸島の粗雑な小さな図を団沙群島の名で地図帳に無理やりくっつけようとしている間に、日本海軍水路部は着実な調査に基づくスプラトリー諸島の海図を作製していた。

Hancox ,David & Prescott ,Victor. 1995. *A Geographical Description of the Spratly Islands and an Account of Hydrographic Surveys Amongst Those Islands*. Durham: International Boundaries Research Unit.

Hancox ,David & Prescott ,Victor. 1999. *Secret Hydrographic Surveys in the Spratly Islands*.Asean Academic Pr Ltd.

(海軍)水路部編. 1941.『台湾南西諸島水路誌：南西諸島・大東島・尖頭諸礁・台湾及附近島嶼・新南群島』東京：水路部.

海上保安庁水路部編. 1971.『日本水路史 1871-1971』東京：日本水路協会.

小林瑞穂. 2015.『戦間期における日本海軍水路部の研究』東京：校倉書房.

後藤乾一. 1995.「新南群島をめぐる 1930 年代国際関係史」『社会科学討究』42 - 3.

補足

海上保安庁水路部が第二次大戦後に戦前の南シナ海海図を改定して刊行したもの3点を古書店で入手した。南シナ海の広範囲を対象とした比較的縮尺の小さな海図で、機密海図ではない。

第 810 号

南支那海 1/4,000,000

昭和 10 年迄ノ諸資料ニヨリ編纂ス

昭和 11 年 7 月 23 日刊行 水路部長 太田垣富三郎

昭和 11 年 8 月 6 日印刷発行 印刷者/発行者 水路部

小改正

(昭和 11 年) -1053-1054-1159-1432-

(12 年) -55-116-172-233-455-513-534-589-653-686-708-790-832-907-937-1134-1194-1217-1314-

(13 年) -64-65-244-416-668-669-725-880-953-1012-1099-

(14 年) -246-426-427-526-732-820-885-886-992-

(15 年) -41-65-198-214-236-314-570-588-681-964-1011-

(16 年) -6-327-528-759-891-

(17 年) -520-587-638-

(19 年) -173-

(22 年) -486-659-

(23 年) -203-333-456-652-694-757-761-762-900-

(24 年) -56-123-171-204-243-244-398-552-612-

(25 年) -224-226-775-930-

(26 年) -127-201-202-313-988-990-

(27 年) -67

1936年・37年のスプラトリー諸島調査以前にそれまでの情報を集約した南シナ海海図が作られていること、38年以降も戦前戦後を通じて小改正が行われていることが知られる。

第1801号

南支那海 南部東区 1/200,000

1939年迄ノ英国、米国及蘭国海図ニ拠リ編纂ス

昭和15年7月16日刊行 水路部帳 小池四郎

昭和15年7月26日印刷発行 印刷者/発行者 水路部

小改正

(昭和15年) -789-966-

(16年) -403-501-527-528-759-834-1035-1116-

(17年) -111-400-520-

(18年) -80-358-

(19年) -173-

(24年) -398-474-644-

(25年) -641-930-

(26年) -126-313-

(28年) -165

第1502号

南支那海南部西区 1/200,000

1937年迄ノ仏国、蘭国及英国海図ニ拠リ編纂ス

昭和17年9月11日刊行 水路部長 福島大助

昭和17年10月2日印刷発行 印刷者/発行者 水路部

昭和30年1月 第2版

小改正 昭和29年-1003- (30年) -776-1316- (32年) -671-375

イギリス、アメリカ、フランス、オランダ各国の海図を参照して作製されたことが明記されているが、当然のことながら機密海図には言及がない。

1930年代後半以降、南シナ海に関して機密海図だけでなく一般の海図が日本海軍水路部によって新規に作製され随時改定されていたことが確認できる。